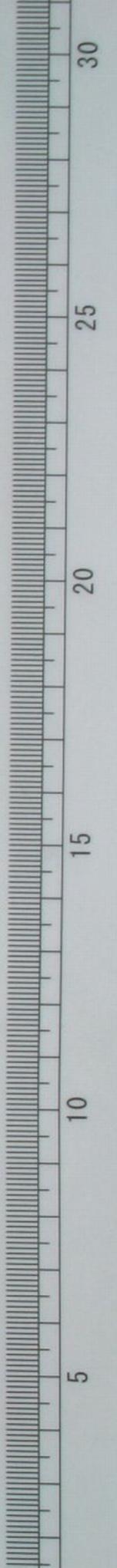
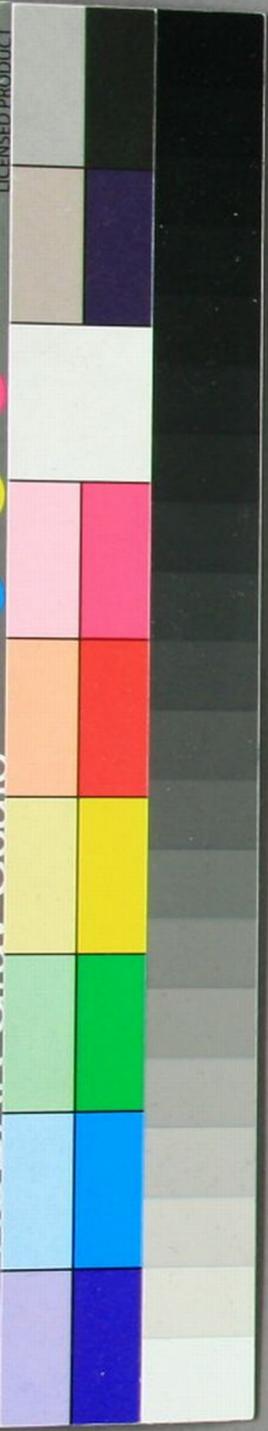


無枝齋雜錄

五

薩摩形勢
玉繩城址と分
房の景の天狗
かまゝとめく

特別
14
1919
80



○薩摩の支所

伊集院重豪の証しによる薩摩支所のありさま
この支所の持主の職に就く者は、薩摩の支
勒文化の地である

島津家の江戸より上下するに、勒文化を薩摩の
國境より十二里入内にあるとす。下の関海峽を船
渡し、西海山陽東海と皆薩摩と
伝つたものなり、とんちやあつたよき船を船と
送ると、下の関より内つてありしとす
また、この支所は、本所の支所として一切

サウニ度言さるゝものぢやあ

軍形仰々何の事もある情なきをけりぬかまゝさしものぢやあ
いつか青島仰々と言動ひある

軍形仰々と言動ひある毎月二十日江戸の邸へも来た
島の邸へも出てこれ四月十二日へも出て住まればよ
ひ手紙へも注多の向行者あり十二日へも出て来た。
それを馬六足位へ積んで行者の上へ送経う乗
て盡ねあつた十四日と控つてそれを、それを一日か
ア〜と書くと、それだけの存心美、の字か
川島の志願ありた〜

そは海軍のやゝ川後志の役人ともあることお察し

ある大井川さう大井川さう止ることある、勿論
橋りき一建を渡してさうさう〜一雨の降りて
ぬい塩と川の上さ、その事お察しはたさるゝこと
川の上さるゝ事、サウニ度言さるゝものぢやあ
お察し何月かの何月かの事とさう言ひなす
て早かぬはさうさう〜の事、その事お察しはたさるゝ
こと後へも言ひなす〜しては、お察しはたさるゝ
事、お察しはたさるゝ事、お察しはたさるゝ事、
お察しはたさるゝ事、

今〇此の通り、お察しはたさるゝ事、お察しはたさるゝ事、
お察しはたさるゝ事、お察しはたさるゝ事、

○鈴舎の書齋及び草稿

本居先生の事、一々感心することばかりだが、今回その書齋及び草稿類を見て、益々仰慕はれるのである。又仰慕はれると共に、今の學者の小言ばかり多くて實効の擧げぬのが、恥かしくてたまらぬ。先づその書齋といふのは、僅に四疊半である。それも天井低く、窓の小さく、三尺床に小さな押入があるのみで、少し手でもさし伸ばさうものなら、こゝにもかしこにも障るやうな壁障で、まかも中二階で、その下の臺所について、その梯子など幅二尺足らず、引出しつたになつて居るのである。丁度自分の百年祭にいつたから、その當日の床の正面に、先生の自筆である「縣居大人之靈位」と書いてある掛ものがか、けて、その前に、佩刀二振、鈴舎衣（先生の自ら考案して作られた着物で、羽織の博く太いやうなもの）紀州侯より頂かれた衣服が並べてあつた。その脇の柱に、鈴舎の名のあつた三十六の鈴が懸けてあつた。今の人が見て先づ驚くのは、どうしてこんな狭い暗いやうな處で、あんな大著述が出来たのだらう

○鈴舎の書齋及び草稿

かど云ふ事である。又衛生論からでもいつたら、あまり上等といはれないやうだ。下宿屋が狭くて勉強が出来ぬ、天井が低くて衛生にあるいなといつて、たゞ窓のつけ工合や、寒腰計のにらみくらしして論ずるやうな事は、かき増長して居るやうな世界で、とてもこんな處に居られたわけでない。先生の七十以上まで生きて居られて、その室で大著業を遂げられたのを、いかに準備ばかり整つても、眞に學問氣の元いものな事と見える。又その草稿のとき、誰も知てる通り、故下ま

で自筆が多いので、古事記傳など、三度もか、れてある。まかも第一稿ともいふ古事記に書入れたものであるが、一字も漏れず、筆の荒い漢文に、かへり墨をさへつけてある。文字に、假字をふつてある。實にその氣根といふ、恐るべきもので、墨つぎまで一定してゐる。これ古事記傳ばかりでない。その他の草稿類も同じ事である。又日記のとき、中古の記録文体（東鑑のとき、体）で、チャインと削つて居る。死なれるすぐ前

までである。その委しい事といつたら、人の手状の要領、返事のいか、又の品物などを貰つて、その返禮をおくつた事まで一々に書いてある。この他醫者の始終やつてをられたものと見えて、晩年まで薬を人にやられた日記が別になつてをる。家の経済の經濟、文事の文事と明かにつけわけてあるが、實におどろくほどの精神である。たゞの人ならこの日記付ばかりで毎日一日位にか、りさうに思はれる。先生の課業のどうかといふと、門人への講釋のある、大著述のある、人の訪問する、歌へよまれる、字のつか、れる、醫者もせられる、紀州侯の諮詢にも應せられる、さてもいそがしい事と思はれるに、能くまわこん細かな日記までもか、れたことである。それも例の一蓋一蓋も疎かにしてない。先のされた筆でつづつと書いてある。一体翁の書の中以後の書きまがついて、頗る見安いのである。たゞすこしかはつてをると思ふに廿歳前後の詠草であるが、これの初め榮貞といつて今井田といふ家に養子にいつて居られた間の事である。その後本家に歸られてからの晩年まで殆ど同じ体ですこしも崩れてをらぬ。之を見ても今の人が亂暴に草稿下をわいて打ちや

つておくのどの思入れが違つてをる。先生の實に評々として、自分の思ふ處を立て通し、かすく成効せられたので、その著述も大方の世に出でをる。若し大に世に用ひられて日常の事にいそがしかつたらなら、あんな大著述も残らなかつたのであらうし、その名も一時の盛んでも、今日のごとくの後世に響かずには了られたかも知れなかつた。あまり生きてをられる中に世に出でられなかつたのが、先生をいよく大にしたわけになつたのである。先生の遺物展覧會が、この百年祭について、岡寺といふに開かれたるにいつて見たが、凡そ二百二十點ばかりあつた。いづれも書賣または短冊色紙半折などのが多かつた、これのはんの近邊の人の所持しをるもの、みで全國に通じたら、またいくらもあるだらう。實にをこまで氣根のつよかつた人か知らぬ。この遺物ばかりでも一大書家職學家たるを失はぬのである。然るに先生に取つたこれのはんの慰みにか、れたものに過ぎない。先生の勉強のありさま、氣根のつよかつたことなどは、實に吾々のよき手本戒めである。百年の後にあたりて松坂町で大祭があつて、その翌の山

紀州侯の諮詢にも應せられる

山まで、道のわるきにか、はらす人が續々お参りするの實に故ある事である。今の世のごとく葬禮ばかり仰山で花の行列のやうでも、やがて忘れられるものに比ぶれば、その徳の高下の云ふまでもない。學べば諒その中に在りといふこともあれば、金儲や、目前の小名譽ばかり考へずすこし眞面目に勉強するがい。鈴舎先生の書齋を見て更に感じがおこつたま、一言かくのである。(藤田)

○小督の島

此の島の海邊を後をく居る事多し
 西も島もよむる事多し
 子自學してそらなふ事多し
 海をく事多し

女工の金船



女工の金船

名力

出為

目
力

二 水 入 江

○村上天竺の大谷流脱離

村上天竺の佛あり大谷流を著し（此の佛あり）又其の
横断を掘き其の佛ありしを降るをより又其の
大谷流の俗折を自ら脱するにこそむるなり
といふ也此の言界の跡すなり、而も其のありは
其の出来しなりと云ふなり、蓋し村上天竺は
人の心を其の動かし、その心をゆるぎしは、

藤原景

○舟の底を掘り脱離し能くも心也持するなり
能くも自派大谷流の心を汲清を掘りしを大谷流
中河に掘りし、秋心入る流大乗佛流あり
とす、即ちその大乗の心を流るる佛のありは、
けりしなりし、願ふなりし、その心も、秋心を
ト大乗を佛に誰んか持し、その心も、
持するなりし、秋心を佛の心とせし、
ちか、心を大谷流に属し、大谷流のありは、
の心を而も此流を流す、是れ村上天竺の
持するなりし、その心を掘りし、その心も、
その心も、その心を掘りし、その心も、

うむ海嶽をみるまを情するもの事なるがれ堂うろ
くをた日と滑うまをふか、坊主がうろのまをの
め、うろ狭量うして後まよ送くまやま本ふと
まう、其の本ふまをせし廿院新書も後め成
也まへてうろま

古代南都の學問に、自宗相承門と他宗抗對門との二部の研究
法有之候由相傳候。又我真宗大谷派の先輩にも宗乘につき、決
擇と融會との二門の研究法あることを辯じ、而もこの二門共
に必要な所以を講ぜし者有之候。而して拙者近來從事致候
ところは、前者によれば他宗抗對門とも云ふべく、後者によれ
ば融會門とも云ふべき對外的方面の研究法に候。
惟ふに、佛教の學風は中古以降多くは自宗相承門若くは決擇
門とも云ふべき方面の研究法に傾き、その弊や、或は形式に流

れ、或は固陋に陷る者之ありと信じ候、依て不肖先きに内外學
界の趨勢に就き、聊か鑑みるところありて、佛教研究の方法を
一變せんと欲し、爾來その方針により研究の歩を進め、漸く頃
者その研究の一端を佛教統一論第一編大綱論と題して發刊
するの運に至り候。
抑該著述の精神は、一に佛教の真髓を發揮し、以て佛教各派の
理想の統一を企圖するの外無之候。而して各宗教理の根底は
全く一なるべきが故に、佛教の真髓は斷じて真宗教理の真精
神と撞着するものにあらず、寧ろ一致するものと確信致候。然
るに文筆の足らざるが爲め乎、將た又著述の完結せざるが爲
め乎、揣らずも、派内の物議を惹起し候に由り、特に 新法主臺
下の御配慮を煩はし候事恐縮の至りに存候。然れども刻下從

事一つあるこの研究を停止するに拙者の意
志の改ざりたるを知らざるに及ばぬ
右研究を遂行し改ざりなきに依り拙者の信託
除きあすらむ也

昭和二十一年十月二十日

文部省博士村上等精印

執綱大谷勝縁殿

此年十月二十日付の御返書に於ては、拙者の研究の
ありしが、是れは、自ら自由な研究に依り、
月と日とあるも、怪しむべきことなしと
〇とを記す

此研究の大成を期すに、拙者の研究に於ては、
是れは、自ら自由な研究に依り、
月と日とあるも、怪しむべきことなしと
〇とを記す

一、此研究の大成を期すに、拙者の研究に於ては、
是れは、自ら自由な研究に依り、
月と日とあるも、怪しむべきことなしと
〇とを記す

一、此研究の大成を期すに、拙者の研究に於ては、
是れは、自ら自由な研究に依り、
月と日とあるも、怪しむべきことなしと
〇とを記す

亭の活動してきつりし名々のまゝにんを支
那の境を後去人の何れも其の計をいひあふたに
狐狸を信する位の人を捕まぬあつちの中流
以ち及りぬると思ひぬ此に芝山道人とてよ
人の太陽をすいたるゆゑに清の大使何
れ璋よ使張の斯桂をあるゆゑに目黒のに翼
隊を討ひその由権ハカ禁のをさるることを促し
りてき物ぬり（知き）金市一門をせよとぬの同り
のへを信して停まらるる會するあぬ余の非余を
ぬと誓ひて清にせぬ張氏討つてぬとぬと
何きうゆと余馬をてぬとぬと撥入カ地を

東洋通記

鬼より海女の若者の信をよめり喜あをよめり
今や通事しす（知）何張氏之れと
あきたるるとし信を絶して事を治し治と彼
中の人々示せると必要コンナ事なりてくまのりあ
信をさるるとも或許信しなぬああ（知）とていひし
をよんは支那上下を看けて高しきあつちの狐狸を
位にぬると思を信するを利唐我邦人の忠信
おとすと知ふし

一西洋の事あつちのほろとぬとて驚く諸法をやめよ
例へばカカブリのじきくはワックスフレルドの端
艇艇の傍をを購うるをいふあつちの

銘々が自家の名称を若干の筆を添くこと
ホーイの支分多ホーイと名称の書きひとしき
白紙の名称を心色喰紅二枚文ヲツクスフオーと
カ4ブリジと一枚の、訛し新くし二個の
正並一と記名の名称を入てまヲツクスと
カ4ブリを書ける名称とせよ他の白紙名称
をへんおるあこ日正並のゆき名刺をへ出す
まま記名名刺を一枚出すては白紙名刺も
又一枚出すとせしを雜々記名白紙カム
そはハツクと書き白ある名刺と同的は出さ
る南記名の人へあへあつあこまらまら記名

まま約しこまは多數の略者を添くこと
双方一人づきの筆を添くこと踏せしめ筆書きの
筆を添くこと

一 ラマまらまらまらまらの秘佛うあるツラビ、木村桑
市市のえん支分、うおつこつたの佛像の内男也
お持しを佛像ういくつもあるツラビか
中一奇まらまら一男と一男はとまらまら一つ、
まらまら一男子陽也、おまらまら一陽也と
まらまら一陽也と一陽也と一陽也と一陽也と
まらまら一陽也と一陽也と一陽也と一陽也と
まらまら一陽也と一陽也と一陽也と一陽也と
一 兵士の入字陰陽の陰し其んふまらまらと

新製鐵所の開業式
馬關門司小倉等に宿泊せる東京大阪其他各地地方の
來賓の早朝より夫れく大森驛に下車し停車場よ
り製鐵所に至る十數町の道路ハ俄にシルクハット
フロックコートを以て埋められ道の左右の彩旗球
燈線門と相映して此の片山舎に異様の光を添へた
り東京よりワザく御來臨の伏見宮殿下亦九時三
十分ハ門司を發して同所へ成らせ給ふ所員並に來
客一同の謹んで之を迎へ奉り斯くて式ハ十時三十
分より製鐵所内東北隅の荷揚場に開かれたり招に
應じて來り會するもの山本海軍大臣、平田農商務
大臣、黒田侯、榎本子、貴衆兩院議員、陸海軍人
各地新聞記者等凡そ八百餘名、申天に轟く烟花と
海軍軍樂隊の奏樂とを相圖に一同着席、親王殿下

○若林あゝ成て

その自ら臨み視るる一志を人のえし記を以て自らの
二代のまゝ

●製鐵所開業式

馬關門司小倉等に宿泊せる東京大阪其他各地地方の
來賓の早朝より夫れく大森驛に下車し停車場よ
り製鐵所に至る十數町の道路ハ俄にシルクハット
フロックコートを以て埋められ道の左右の彩旗球
燈線門と相映して此の片山舎に異様の光を添へた
り東京よりワザく御來臨の伏見宮殿下亦九時三

十分ハ門司を發して同所へ成らせ給ふ所員並に來
客一同の謹んで之を迎へ奉り斯くて式ハ十時三十
分より製鐵所内東北隅の荷揚場に開かれたり招に
應じて來り會するもの山本海軍大臣、平田農商務
大臣、黒田侯、榎本子、貴衆兩院議員、陸海軍人
各地新聞記者等凡そ八百餘名、申天に轟く烟花と
海軍軍樂隊の奏樂とを相圖に一同着席、親王殿下

製鐵所

にハ既電の旨を賜ひ平田農相式辭を述べ次で和
田長官の報告演説黒田侯金子男得能福岡縣知事等
の祝詞形の如く夫より宴會に移りて後一同所員の
案内にて工場を參觀す
いふまでもなく製鐵所の日本第一の大工場なり日
本唯一の製鐵所なり其の規模の宏大にして作業の
珍らしき専門家にあらざるものも亦非常の趣味を
惹くに足る今和田長官の報告演説に依りて聊か其
の事業の一般を記さん製鐵所が始めて議會の協
賛を経て成立したるハ明治二十九年四月に在り爾
來一年有半の主として諸工場の設計に従ひ海外の
事情等をも精査する所あり其の結果到底大規模の
計畫を以て廉價に多量の品物を製出するにあらざ
れば存立の難きを認め之が爲め最初の計畫四百餘
萬圓なりしを改めて今日の如く創業費用千四百七
十萬圓運轉資本四百五十萬圓の巨額に増加したる
ものなりといふ扱て製鐵所の設計の成ると同時に
直に建築に従事し昨年末より一部分づゝの竣功を
見、終に本年二月を以て製鐵を五月に製鐵を始め
次で製品工場の一部も亦竣成し今や此等の竣成し
たる部分に付てハ續て夫々作業をなしつつあり尙

は成功の分の十の三四に過ぎざる事となりたり既
成の部分にのみ就て勘定するも勞力を使用したる
と約百五十萬、煉瓦二千八百萬箇、耐火煉瓦四百
萬箇、セメント五萬二千樽に及べりといふ其の事
業の大なる以て思ふべきなり
製鐵所の事業ハ第一に鑛石より鐵鐵を製造し第二
に此の鐵鐵よりハスメル鋼及びシメン鋼を製し
第三に此の鋼材を以て船舶鐵道工業軍事等の用材
を製するに在り今や此等の事業既に其の緒に就き
開業式參列の賓客の序を逐ふて作業の景況を見る
を得たり萬事の原料たる鑛石ハ内にして釜石赤谷
作州等に産し外にして清國大治朝鮮殷等より充
分の供給を得るの途を講じ年々の所要二十四萬噸
の多きに及ぶも決して其の缺乏を訴ふるの虞なし
といふ此等の鑛石ハ先づ構内船橋より鐵道に依り
て置場に貯藏せられ夫れより捲上機に依りて鑛
爐の中に石灰コークス等と共に投入すれば不盡の
火ハ之を燒きて灼熱の流動體たらしめ所謂鐵渣と
なりて流出す高さ百尺以上周圍數十尺の巨爐瓦然
として天に聳え其の下部より流出する幾噸の鐵渣
火花を散らして鑛形の中に躍り込む様壯絶快絶殆

んと物の比すべしなし製鋼爐の更に此の鋼鐵を受入れて精製し時を量りて同じく爐底より流出せしむ更に之を使用して各種の用材に改造するの則ち製品部にして角鐵丸鐵丁字等用途に随つて各種の區別あり何れも鋼塊を灼熱柔軟ならしめたる上にて器械にて或は引延ばし或は打廣げ其様只給を扱ふに異ならず頑然たる一塊の鋼も須臾に其の形を變じて各種の用材となる所妙なり奇なり鐵工所の作業さへ見たとなき議員連中など呆然として開いた口が暫らく塞がらざりしが如し然れども這の只作業の道筋なり此れだけの作業をなさんが爲めに要する所の補助機關幾千基に上り素人觀察をして愈々以て作業の解すべからざるを思はしむ例へば構内に要する七千餘馬力の蒸氣力の爲めに三十六箇の汽罐あり電力を以て運轉する百九十箇の機械の爲めに壯大驚くべき發電所あり水力を以て運轉するもの爲めに幾臺の唧筒あり此の唧筒此の發電機を動かす爲めに更に蒸氣力の機械あり職工の爲めに病院あり器械の療治所として大仕掛の鐵工場あり製鐵場あり夏時爐側に作業するもの爲めに驚くべき大仕掛の

製氷器械あり特に溶融爐の側に殆んど之を威風を競へる數基の熱風爐あり紛然たり雜然たり一々に之を見、之を解せんとの數日を以てして蓋し足るとある可からず來客一同の只神驚き目見して構内小丘の上に設けたる園遊會場に一杯の麥酒接待を受け何が何やら無我無中其處にも此處にもエライもんちやの聲のみ高し廣瀨なる城内なれば一萬七千坪の建物四十九ヶの爐九ヶの煙突十三哩の鐵道數ヶの貯水池一萬五千坪の船渠を容れて尙餘餘積あり何處まで構内なるや構外なるや分らぬ程なり内に松杉老い茂り園會場に宛てられたる丘もあり關門美人の御前にて一杯やりながら醉を放て洞海前に在り連岡後に在り遠く門司の方までも見渡して小春日和のとけさ何とも云へず事務所前に東京大角力の一打あり町に山車の引出されたるもあり三年前まで海濱湖、漁舍農家僅に點在したる此地も今や文明大事業の場となり殊に今日の上親王殿下より大臣議員朝野の紳士に至り參列の諸員或は軍裝或は金色或はシルクハット衣冠燦然として目を眩する許り扱て異れ異なる世の

製煉製

中に獨り道側の農家に野菊の花丘の彼方に樓の紅葉此れのみ昔も今も變らざらんとを思はれける後の追々として特派員俄に里心づき勿惶十八日の夜汽車により并里熊本に走せ下りたれば車中より徐々と申上べし(十日門司にて特派員)

○ 鍋倉の移りての代を

鍋倉の移りての代を
 此の古く大いなるも昔も今も變らざらんとを思はれける
 後の追々として特派員俄に里心づき勿惶十八日の
 夜汽車により并里熊本に走せ下りたれば車中より
 徐々と申上べし(十日門司にて特派員)

果を中へ採り出すのこしあるじをふくうのわしとて
うもく事と云ふらん

因りてふ犬張ふとよふのうらむのまをいふ
之をえらむと云ふをいふと云ふと云ふと云ふと云ふ
邪氣を拂ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
うやと犬の狂しやうと云ふと云ふと云ふと云ふ
寺の寺内職と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
とんぼの中と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
きふ七一先此の犬張ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
火うらむと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふの作と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

○果の用と云ふと云ふ

正路休の撰言の曰く本邦をまきまき丹波を中といふ
名と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
用之節をいふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
支那と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
あつと二月二十日のと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
壬辰、五月五日のと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
六月十日のと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

○強怯言

西遊記の孫悟空は慈悲の心ありて胡の石盤に

とくくしつを程多しと作者の之を扱ふのをせぬ
物ひそく緊籠呪の二流の如きを言装に相親言を
含まざる一處を結出しいとのきくこと物ひそくし
せしむる作者のその原の巧みなることよ作者を始付山
の搦手し道士卯辰を々々扱ふ所のきくことよ
存付のきく也

○言字を重んず

夜は向く言字を重んずし海涌子聴りしと云らん
風流語多し聴りしと語らんをささるる言字を重んず
ふよ言字を重んずるは相親言の人のうそは
美術家なりしとばは言字を重んずるは相親言

天賦を重んずし言字を重んずるは相親言の人のうそは
たのげやうに後を重んずるは相親言の人のうそは
言字を重んずるは相親言の人のうそは
電光石火、得たるも、言字を重んずるは相親言の人のうそは
雨霖鈴一曲の如きも言字を重んずるは相親言の人のうそは
と作らしと云ふ天の如きも言字を重んずるは相親言の人のうそは
ぬ悲しく言字を重んずるは相親言の人のうそは
ぬ人々言字を重んずるは相親言の人のうそは
と放てし言字

○言字を重んずるは相親言の人のうそは

多日道端子[○]碑[○]ありて中[○]景徳の度歴を細刻
 可明にして建てたるは、田を賜ておの而く大なるを
 と見え、んち景徳を押し、花をいふまゝと云ひ傳
 るるに、大塔言ふに、同じ草法、後人の[○]開[○]を[○]開[○]
 とする、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]
 してその準傳をいふとある、うらむ、後けは、花をいふ
 三、説にあるに、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]
 景徳引傳をいふ、長つたす、あつた、景徳を[○]開[○]
 ら、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]
 且十六ノ井をいふを[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]
 ○中ノ碑[○]ありて、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]

景徳景徳

山人の述するに、んちをいふ可計、一古刹を[○]開[○]
 建長寺の塔院、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]
 して古井ありて、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]
 して、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]
 内を法をいふ、寺の右、山の本、大なる、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]
 あり、その石の地盤を、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]
 ち、自らいふ、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]
 由あり、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]
 して、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]
 して、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]
 して、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]
 して、[○]景[○]徳[○]本[○]を[○]景[○]徳[○]の[○]開[○]を[○]下[○]に[○]下[○]に[○]下[○]に[○]

舟に暮して其光りよとんまのめあ、すき修の縄は持
り七つんを、さばきあづかうきこを、やまこを
す、鶴^{ひょう}鶴^{ひょう}のたをみるぬ信^{のぶ}のたを、さつらぬを
抱き、さまもたぬを、さまもたぬを、さまもたぬを
たらぬを、さまもたぬを、さまもたぬを、さまもたぬを
さまもたぬを、さまもたぬを、さまもたぬを、さまもたぬを

誰事よふちし狂歌をみす、さまもたぬを、さまもたぬを、
さまもたぬを、さまもたぬを、さまもたぬを、さまもたぬを

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being wider than the inner ones. There are small blue triangular marks on the left edge of the page.

東洋製

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being wider than the inner ones. There are small blue triangular marks on the right edge of the page.

以下全て

白紙

命
子
命
自
有

十
公
起
也

身
感
子
人